

# ミャンマー・バガン観光産業の 重点投資分野



三菱UFJリサーチ&コンサルティング  
国際研究室  
研究員 矢野 麻美子

## 1. はじめに

2011年以降の改革により、ミャンマーの観光産業は著しく成長している。ミャンマー政府ホテル観光省(MOHT)の報告によれば、ミャンマーへの観光客の数は2011/12年には87万人であったものの、政治的、経済的安定を受けて、2015/2016年には472万人に増加した。観光客の7割はアジア諸国出身(特にタイ、中国、日本)であり、続いて西ヨーロッパ、北アメリカである<sup>1</sup>。

アジア開発銀行によれば、観光業はミャンマー経済の重要な牽引要因となりつつあるという。2015年には観光業からの収益は前年比19%増加、21億ドルであり、ミャンマーの国内総生産(GDP)の4%になるという<sup>2</sup>。また、The World Travel and Tourism Council(WTTC)によれば、観光セクターの雇用は2015年から2026年にかけて66%増加する予測であるという<sup>3</sup>。このように、ミャンマーでは観光業の経済への役割が大きくなりつつあり、投資産業として有望視されている。

ミャンマーの観光産業を支える観光資源は多種あるが、そのうちミャンマー観光の目玉として特に注目されるのがバガン遺跡である。バガンは、インドネシアのボロブドゥール、カンボジアのアンコールワットとともに世界三大仏教遺跡の一つとして知られている。バガンは1044年に歴史上初めてのビルマ族統一王朝の都が置かれた土地である。ミャンマー中部に位置し、エーヤワディー川東岸に広がる平原に大小さまざまな仏教遺跡が点在している。もっとも観光地としての認知度は世界的には未だ高いとはいえず、ミャンマー観光産業のさらなる発展のためにはバガンへの投資が鍵である。筆者は2017年11月にバガンを訪れたことから、その経験をもとにバガン観光の魅力と課題、投資必要分野について考察する。



バガン・ビューイング・タワー展望台からの眺望

<sup>1</sup> MOHT, "Myanmar Tourism Statistics 2015," <http://www.myanmar-tourism.org/images/tourism-statistics/2015.pdf>. Frontier Myanmar, "Opportunities and challenges abound for tourism sector," October 27, 2016, <http://frontiermyanmar.net/en/opportunities-and-challenges-abound-for-tourism-sector>.

<sup>2</sup> ADB, Asian Development Outlook 2016: Asia's Potential Growth, 2016, p216.

<sup>3</sup> Directorate of Hotels and Tourism, Co-operative Department, in MOPF/Central Statistical Organization, 2016 Myanmar Statistical Yearbook, p.1204.

## 2. バガン観光の魅力

バガンの魅力といえば、まずはなんといっても壮大な仏教遺跡群だ。平原に無数に広がる大小さまざまな仏塔や寺院はどれも歴史的価値があり見応えがある。主要な見どころだけでも1日で回りつくすのは困難で、宿泊して数日滞在するのが望ましい。寺院の中でもアーナンダ寺院はひととき印象的で、寺院内回廊の四面に立つ高さ約10メートルもある巨大な黄金の立像(過去四仏)は圧巻である。その他タビニユ寺院、ブーパヤ・パゴダ(仏塔)、マヌーハ寺院、ミヤゼディ寺院、スラムニ寺院、パヤートンズ寺院など、おすすめを挙げればきりがなし。また、バガン・ビューイング・タワーの展望台からは平原に広がるバガン遺跡群を一望でき、異世界に迷い込んだかのような錯覚を抱かせる。海外から遠路はるばる観光に訪れる価値は十分にある。

バガン特有のお土産も魅力の一つだ。職人が作る漆器や、伝統芸能で使われるパペット人形、伝統工芸の砂絵<sup>4</sup>など、訪れる遺跡の先々でお土産が売られている。アジア雑貨や工芸品が好きな人は楽しめる。ヤンゴンから飛行機で所要1時間20分程という近さであり、航空便の1日あたりの便数も多く便利である。



アーナンダ寺院



ブーパヤ・パゴダ



伝統芸能で使われるパペット人形

## 3. 課題

バガン観光にはいくつか課題も見受けられる。まず、平原に無数に点在する遺跡群を見て回るための交通手段の整備が不十分なことだ。バガン観光の交通手段としては主に車・馬車・Eバイク(電動の原付スクーター)・自転車がある。車はチャーターできるが、遺跡群が点在する平原の奥は舗装されていない小道が多く車は入り込めない。馬車は風情があってよいが、車に比べてスピードが遅く、観光名所を全て回るには効率的とはいえず、小道にも入りづらい。Eバイクは便利で観光客によく利用されている。ホテルや街中で簡単にレンタルすることができ、自転車扱いなので免許も不要だ。自転車扱いといっても、日本でいうところの原付スクーターであり、スピードも出て小道でも小回りがきく。もっとも、ヘルメットなしで、自動車やトラックが走る道路で運転することになり、安全とはいえない。道路や小道は舗装が不十分で砂埃がひどく、タイヤをとられて転倒しかねない。気温が高いためサイクリングは体力勝負で、自転車の利用は限られた狭いエリアの移動に限られる。

観光客に対するお土産など物売りのマナーも改善が必要だ。筆者が実際に体験したところでも、

<sup>4</sup> 布に砂で絵を描いて付着させたもの。完成すると丸めて保管しても、洗濯しても大丈夫だという。

観光客が寺院へ入る際、靴を脱ぐが、脱いだ靴を観光している間見ていてあげる、と勝手に申し出て、観光客が戻ってくると、靴を保管しておいた、とってお土産屋に誘導し、押し売りを始める。暗い寺院に入ると、現地の人突然英語でガイドを勝手に始めてくる。ガイドをしながら徐々に売場へ誘導し、土産物や砂絵を高い値段で売りつけてくる。このようなことが観光名所にいく度に繰り返されるのは、観光客を誘致する阻害要因となりえる。

ニャウンウーやニューバガンの街中ではホテルやレストラン、ミャンマー料理の食堂など大分整っているものの、さらに近代的なホテル、レストランやカフェなどが増えるといいだろう。2016年8月に発生した地震で、多くの仏塔が損壊し、いまだ修復中で立ち入り禁止の仏塔が多く存在していることも課題である。

#### 4. 投資必要分野について

以上を鑑みるに、今後、バガンを観光地としてさらに発展させるためには以下重点的な投資が必要と考える。まず、舗装が不十分な道路・小道の整備である。幹線道路とは別に、Eバイクや小型自動車などしか走れない、主要な観光名所とホテルや街をつなぐ観光用道路を舗装、整備し、Eバイクで安全に観光ができるようにするのもよい。また、Eバイクの他に、小回りがきく三輪タクシーのような小型の自動車の開発が望ましい。

土産売りについては、ミャンマー政府ホテル観光省や地方自治体が、行き過ぎた押し売り行為のないよう、監視し、マナー教育をすべきだ。お土産の種類も商品開発して増やす必要がある。街区においては外国人好みのホテルやレストラン、カフェへの投資も必要だ。特にバガンは日中非常に気温が高いため、観光の間に何度も休憩に立ち寄れる涼しいカフェがあるとよいだろう。予算をあてて、地震で損壊した仏塔・遺跡の修復も早急にすすめる必要がある。

世界遺産への登録もバガン観光の成長にとって重要である。ミャンマーは、1990年代に当時の軍事政権が国連教育科学文化機関（UNESCO）に申請しているが、原型を留めない修復作業や、景観を損ねるバガン地区での展望台建設や道路整備、ゴルフ場開発などがあったとして却下されたという。ミャンマー政府は2019年の登録を目標に再申請を予定しており、日本も国際協力機構（JICA）が観光開発計画の策定に協力している<sup>5</sup>。世界遺産に登録されれば、認知度が向上し、さらに多くの観光客誘致が可能となるため、歴史的遺跡を本来あるべき姿のまま保存した上で、いかに景観と調和した観光業開発を進めるか、慎重な対応が求められている。

（写真撮影：すべて筆者）

##### < 執筆者略歴 >

都市経済開発修士（ロンドン大 UCL 校）、法務博士（東京大法科）、司法試験合格者、不動産証券化協会認定マスター。

タイのスラムで NGO ボランティア活動、銀行員（不動産証券化）、NGO リーガルエイド事業、国連人権高等弁務官事務所（在キルギス共和国）、内閣府国際平和協力本部事務局を経て、2016年6月より現職、研究員。代表作として“A Human Rights-Based Approach to Human Security: The United Nations Approach to the Right to Adequate Housing in Kyrgyzstan,” *Journal of Human Security Studies*, Vol.5, No.2. Autumn 2016, pp.164-184.

<sup>5</sup> NIKKEI STYLE、「“不思議の国”ミャンマーの遺産、世界遺産になれるか」

<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO13853170Z00C17A3000000?channel=DF140920160941&page=2>（2018年1月3日閲覧）。